

岡田一次名誉教授の米寿を記念して

研究施設のガラス戸棚の中に、風呂敷に包まれた木箱が大切に保管されている。この木箱にはアメリカで造られたロバート・マッケンゼン型の人工授精器が入っている。これが、1949年（昭和24年）に新制玉川大学の発足と同時に39歳の若手教授として赴任した岡田一次博士が、翌年の1950年（昭和25年）に小原國芳学長（当時）の快諾を得てミツバチ研究に着手し、学校経営の苦しい状況下でありながら、ミツバチの品種改良のために購入していただいた人工授精器、そのものである。

玉川大学でのミツバチ研究開始のあらましは、岡田博士によって「玉川学園学術教育研究所所報5号」（1984年7月）に「自然研究におもうこと」と題して記されている。人工授精器をご覧になった小原学長が、「こんな簡単な道具で、世界一を目指すアメリカの蜂の改良が進むのか、素晴らしい大発見だ」と喜んで下さり、その一言で大金を使って弱気になりかけていた気持ちが一新され、新しい研究がスタートしたと述べられている。さらにミツバチ研究に先立ち、世界の情報を得るに至った出来事は見逃すことができない。岡田博士の初期の研究はキノコバエについてで（p.117 業績集参照）、あるときアイオワ州立大学のラフーン教授からキノコバエ論文の寄贈依頼を受けた。戦禍を逃れて残った大切な2セットであったが、その内の1セットを進呈した。そのお礼と共に、同じアイオワ州立大学のミツバチ研究者であるパドック教授を紹介され、教授のお骨折りによって、1951年（昭和26年）9月にアメリカから4種の種蜂の輸入が実現したのである。さらにイギリスのクレイン博士の就任によって再起された国際

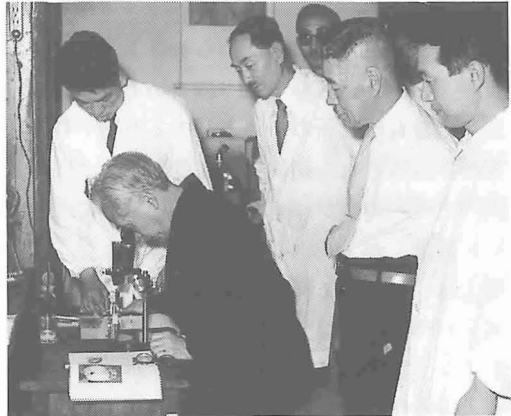


図1 小原総長に人工授精器を見ていただく

誌「Bee World」の入手や国際ミツバチ研究協会との繋がりができ、そのことは世界のミツバチ・養蜂研究の実状を知る上に多くの情報をもたらしてくれた。

岡田博士が常日頃話される中で、1955年（昭和30年）頃から始まったローヤルゼリーのブームのきっかけを作った重要な貢献を忘れることはできない。1959年（昭和34年）4月26日に朝日新聞社から発行された「アサヒグラフ」の表紙には、現在の天皇陛下の結婚記念の写真が飾られており、紙面の多くは「皇太子御結婚」の特集である。その12頁～13頁に「話題の薬 ROYAL JELLY」と西ドイツから輸入されたローヤルゼリー製剤が大々的に紹介され、王台中のローヤルゼリーの写真が岡田博士によって提供された。その後岡田博士のもとには製薬会社関係者の訪問が相次ぎ、わが国におけるローヤルゼリー生産の開始とローヤルゼリーに対する科学的知識の普及が行われ、今日に至っているのである。

岡田博士を中心に着々と進められてきた研究



図2 ローヤルゼリーの全面広告が掲載されたアサヒグラフ

の成果は、世界的にも認められるようになり、その実績が評価されて、1979年11月に玉川学園学術教育研究所の一つとしてミツバチ科学研究所が設置され、初代主任に就任した。同時に国内で唯一のミツバチの学術雑誌として「ミツバチ科学」が1980年1月に創刊された。岡田博士は「ミツバチ科学」にニホンミツバチ、スズメバチ関連の論文を多数発表した。特に1巻2号の「参考図書紹介」の欄に「ハチミツの洋書」を紹介し、その後3巻4号の「ミツバチ人工授精の洋書」まで、39冊の外国図書を紹介しており、外国でのミツバチ研究の内容を読者に伝えている。「ミツバチ科学」誌は多少の発行の遅れが生じることがありながらも、岡田博士の意思を継いで、1回の欠号、1回の合併号もなく年4回、現在まで71冊目である18巻3号の発行に至ることができた。

1985年3月退任された岡田博士は玉川大学名誉教授となられ、本年9月には米寿を迎えられる。この意義深い年にあたって、1990年に

自費出版された「ニホンミツバチ誌」が玉川大学出版部より再版され、改めて多くの方々の目に触れる事になった。また本号では、75年にわたる研究業績を紹介し、さらに岡田博士と関係の深い国内外の方々から思い出のメッセージを多数いただき、素晴らしい記念号とすることができた。

1949年に開始されたミツバチ研究の歴史は、50年を迎えようとしている。ここ数年間の間に、これまで4種であったミツバチが7種に、さらに9種にと、新しい発見が続いている。玉川大学でもニホンミツバチ、そしてマルハナバチと研究のテーマは益々深く、そして広がってきている。

筆者は1997年4月から松香光夫教授のあとを受け、ミツバチ科学研究施設主任を拝命した。これからもスタッフ一同、さらにミツバチ科学に関する研究活動を押し進めたいと、この記念する年にあたり誓いを新たにす次第である。

(玉川大学ミツバチ科学研究施設 吉田 忠晴)

岡田博士の長寿を願って

国際ミツバチ研究協会終身名誉会長 Dr. Eva Crane

玉川大学名誉教授、岡田一次先生がこのたび88歳の誕生日を迎えられると伺い、心からお慶び申し上げます。

玉川大学ミツバチ科学研究施設が今日まで発展し続けていることは、これを設立された岡田

博士の高い見識と確固とした構想の賜物といえよう。また、博士は50年におよぶニホンミツバチ研究から論文を多数発表され、このミツバチ種については誰よりも深い知識をお持ちであろう。ニホンミツバチの多様な活動をとらえた

膨大な生態写真から精選したものを、多くの書籍にまとめておられるが、他の研究者の依頼にも快く応じて、貴重な写真の転載を許可されている。私がこの温帯に生息するトウヨウミツバチ種に興味を持つきっかけは、岡田教授から与えられたのである。

教授のミツバチ研究業績は世界からその価値を高く認められ、1974年に国際ミツバチ研究協会 (International Bee Research Association) の評議員に任命された。

私は1984年3月にミツバチ科学研究所 (当時) の招聘を受けて日本を訪れた。岡田博士のお宅で楽しいひとときを持ったのち、岐阜への旅行にご夫妻も同行して下さいました。岡田博士は偉大なタイムキーパーであった。というのも、岐阜から東京へ帰る新幹線の車内で、博士はポケットから大きな懐中時計を取り出して、こうおっしゃった、“この列車は3時10分ちょうどに富士山の近くを通ります。この時計を見て頃



図3 クレーン博士をお迎えして

合いにあなたに知らせれば、あなたはシャッターチャンスを見逃さずに富士山の姿をカメラに収めることができますね”。

福岡をおとずれた記念にとある方から置物をいただいた。ひとりの知恵のある翁とその足もとの丹頂鶴 (Crane) の像で、日本の長寿の象徴だとのことであった。今でも大切にしている。私の母は107歳まで幸せに暮らした。岡田博士もいつまでもお元気で、楽しい日々を過ごされるよう願っている。

岡田博士の米寿にあたって

ポーランド農業大学教授 Prof. Dr. Jerzy Woyke

玉川大学名誉教授岡田一次先生が米寿を迎えられ、心よりお慶び申し上げます。

ポーランドは日本から遠い国ではあるが、私は岡田教授と1950年代はじめからお付き合いいただいている。当時玉川大学ではミツバチ研究に必要なロシアの文献が入手困難とのことで



図4 ご自宅のニホンミツバチの前で

助力を求めてこられた。私は出来る限りのお手伝いをさせていただいた。

1974年初めて訪日の機会を得たが、ポーランドの通貨は両替できず、手持ちの米ドルも非常に限られて困っていた私は、教授のご親切な申し出に従ってご自宅に泊めていただいた。日本の習慣にくらい私はさらに色々ご迷惑をおかけしたが教授は寛大に許して下さいました。

岡田教授が準備して下さいました奨学金のお陰で私は日本国内のミツバチ研究組織や養蜂家を訪問し、美しい日本の景色にも接することができた。その後さらに2回の訪日時にも重ねて先生宅にお招きいただいている。

玉川大学ミツバチ科学研究所 (現研究施設) の設立は教授の大きな功績であろう。教授とその同僚により幾多の重要な科学的発見と報告が

なされ、きわめて短期間のうちに玉川大学ミツバチ科学研究施設は、一流の重要なミツバチ研究機関として世界に知られる存在となった。今回再出版された「ニホンミツバチ誌」にはトウヨウミツバチについての多くの知見がまとめら

れており、教授のミツバチに関する最も重要な出版物のひとつであろう。

数多くのご親切に改めて感謝申し上げますとともに、岡田教授が充実した、すばらしい日々を過ごされるようお祈り申し上げます。

老いてますます研究を

国際蜂療保健蜂針研究会会長 教授 房 柱

岡田一次教授は日本の最も卓越した養蜂学者、農業昆虫学者であり、1950年以来玉川大学において創始された養蜂学研究は豊かな成果を収められました。また先生は国際交流に熱心で30名もの博士を心をこめて指導され、世界的に傑出した養蜂学者であることは誰もが認めるところであります。

1986、1996年の二度、私は岡田教授夫妻をお訪ねし暖かいもてなしを受けました。幸運にもその折、半世紀余にわたって教授が蓄積された昆虫学養蜂学の保存資料、執筆年別に整理された手稿や公文書類、年別に箱に区分けされた写真フィルムや新聞記事の切り抜き等を見せて頂きました。先生はここまで学問に全てを捧げて打ち込んでおられる、私はこの時の感動を永遠に忘れることはないでしょう。

岡田博士の米寿にあたって、当市の書家陳鳳

桐先生が筆をふるった祝詞を謹んで贈呈し岡田先生のご健康と長寿をお祝いするとともに、蜜蜂生理学でノーベル賞を受けたフォン・フリッシュ博士のように老いてますます盛んに研究を進められますようお祈り申し上げます。

図5 房柱氏より贈られた献辞（大意）米寿を迎えられた岡田翁は東西の研究の高い峰を究められ、その著作は百余種、写真は数千枚、三十名もの博士を世に出し、世を潤す功績をあげ、その業績はフリッシュを追い、寿命は南山の松に比すほどである。

（訳 松本みどり、本文とも）

岡田翁米寿賀
 著書百餘種
 精研東西
 蜂學
 博士出師再建
 澤世
 松功幅
 葉追弗里希壽山
 南山
 房柱氏
 一九九六年六月

交誼 50 年

初めての出会い

岡田先生が米寿を迎えられると聞いて、もうそんなお年かと驚いた。はじめてお目にかかったのは終戦直後で、わざわざ岐阜へ来られ、今度ミツバチの研究をはじめたいから、よろしくというご挨拶だった。かれこれ50年も前のこ

渡辺養蜂場 渡辺 孝

とだから、先生はまだ30代だったはずである。

それからしばらくしてお弟子さんが卒論にミツバチを取り上げるからよろしくというお手紙があり、若い学生さんが来られた。今から思うと、それが酒井哲夫氏で、氏はその後、岡田先生の後継者として立派に大成された。

「月刊ミツバチ」のえにし

岡田先生との交流が特に深くなったのは、「月刊ミツバチ」という雑誌を通じてだった。「月刊ミツバチ」といっても、今では知らない人が多いだろうが、昭和23年に創刊され、昭和45年に廃刊になった世にもユニークな雑誌で、農林省北海道農業試験場の関口喜一技官が編集長だった。発行所は養蜂技術協会、会長は桑原万寿太郎博士で、顧問には徳田義信博士が名をつらねておられた。関口さんは編集長といっても、月寒の農業試験場に勤務するかたわら、こういう月刊誌の編集をつづけたのだから、その苦勞は並大抵ではない。隔月とか、季刊ならまだしも、月刊というのは毎日が激務の連続である。

これでは余りに関口さんが気の毒だということで、昭和33年からは編集委員というものを設け、北大の坂上昭一助教授（当時）、畜産試験場の中野茂氏、岡田一次先生、それに私の4人が委員を仰せつかった。しかし正直なところ、これもせいぜい寄稿の回数をふやす程度で、余り関口さんの負担の軽減には役立たなかったようである。しかし岡田先生だけは例外で、「ミツバチ記」をはじめ意欲的な原稿をつぎつぎに寄せられ、またミツバチや花の写真を撮って表紙を飾られるなど、その活躍ぶりは群を抜いていた。

アメリカ留学の印象

そのうちに私はアメリカのある研究所へ留学することになった。岡田先生がわがことのように喜んで下さって、向こうに行ったら、アイオワ大学のパドック先生にぜひ会って、よろしく伝えてくれとおっしゃった。先生のお言葉によると、パドックさんは恩師だそうである。私はピッツバーグのメイナード研究所を足場にして、ミネソタ大学のハイダック博士、ルイジアナ大学のマッケンゼン博士、ウィスコンシン大学のファーラー博士、ワシントンの国立養蜂研究所のマイケル博士らを訪問したが、そのほかに前々から一度お会いしたいと思っていたアイオワ大学のローゼンビューラー博士（当時）を



図6 パドック博士(左枠内)から贈られた蜂群の前で訪問することを思い立ち、1962年の5月のある日、エイムズを訪問した。アイオワ州は見渡す限りの牧場のつづく農業州だが、ローゼンビューラーさんはさっそく私を養蜂場へ案内して、彼のご自慢の珍品種を見せてくれた。白眼のミツバチ、クリーム色の眼のミツバチなどが巣脾の上をゾロゾロ歩き廻っている光景は、正直なところ余り気持ちのいいものではない。いずれも眼が見えない系統だから、実用的には価値はないが、ミツバチの遺伝法則を追求する上からは貴重なものとローゼンビューラーさんはいっていた。

彼と話し込んでいるところへ、パドックさんがやって来た。すでにリタイアしている好々爺で、何を聞いてもニコニコしている。岡田先生の伝言を伝えたら、一瞬目を輝かして、くれぐれもよろしく伝えてくれといっていた。

玉川大学での講演

日本へ帰ってから、岡田先生に一度ぜひ玉川大学に来て、ミツバチを専攻している若い人たちにアメリカの話をしてくれといわれた。晩秋の午後だったと記憶するが、大学へ出かけてゆき、教室でカラースライドを使ってアメリカの学会や業界の話をした。もう30年以上も昔のことだから、当時、私の話を聞いたみなさんも今はひとかどの学者や社会人になっていられるはずである。講演を終わってから、岡田先生にぜひ家に寄ってくれと引っぱられ、奥様の手料理のすき焼きをご馳走になってしまった。私の話を聞いてくれた若い人たちもいっしょで、と

でも楽しい一夜だったことを覚えている。

ブカレストのアピモンディア

昭和40年(1965)の8月、ルーマニア政府から招待状が来て、ブカレストでアピモンディアをやるから、ぜひ来てくれという。ちょうどいい機会なので、前後2か月ヨーロッパの大学や業界を見て廻ることにした。ブカレストへ着いて出席者名簿を見たら、日本からの出席者には私のほかに岡田先生の名前がある。これは、これはと驚いて、さっそく先生のホテルへ向うき、一緒に食事をしたりアピエクスポを見学したりした。

大会初日には、アメリカで親しくなったハイダックさんやハンブルトンさんにも岡田先生を引き合わせが、ハイダックさんは岡田先生の論文を読んで、「ああオカダ、あなたの研究は素晴らしい。カイコをローヤルゼリーで育てたら、抜群の効果があつたのでしたね。あれは画期的なものでした」と絶賛していた。

先生の偉大な功績

その後、名古屋のアピモンディアにおける先生の活躍とか、イギリスのエヴァ・クレーン女史をわざわざ拙宅まで連れて来て頂いたこと(昭和59年)など、思い出は尽きないが、残念ながら紙数が尽きた。

最後に一言だけ結論めいたことをつけ加えよう。岡田先生の学問的業績は、上述のように、最高の碩学ハイダックさえ絶賛するくらい偉大だった。しかし先生の偉大さはそれにはとどまらないと思う。先生のより大きな功績は、多くのすぐれたミツバチ学者を育てられたことだと思う。酒井哲夫、松香光夫、佐々木正己、吉田忠晴などという俊秀がミツバチ研究所という組織のもとにユニークな研究を展開しているのは壮観であるが、これはすべて岡田先生が手塩にかけて育てられた人材と組織である。このご功績は不滅である。先生の一層のご健康とご多幸をお祈りしたい。

亡父の代からの御親交を頂く

岡田先生が御元気で滋に米寿を迎えられた事は私は勿論養蜂業界にとってこれ程喜ばしい事は御座いません。先ず御祝福を衷心より申し上げます。私が先生と出会う事ができたのは遠い過去のことです。亡父、清水混完に「今日は玉川大学の蜂の大先生の所に連れて行く」と言われ訪問しました。丁度日の短い秋の午後でありました。駅より線路沿いを歩くと沼に当たりその辺から坂道になり登りつめた所に木造りの校舎がありました。滋で先生に亡父が「俺の倅です。宜しく…」と紹介してくれたのが最初であったと記憶しています。校舎の下には時折トンネルを通過する電車の軋る音が身にしみました。先生はその時5~6名の生徒が自分の椅子を工作で造っている様子を案内してくれました。岡田先

埼玉養蜂株式会社 清水 進一

生曰く「この学校は小原校長が自給自足の精神で何事でも生徒自らが進んでやる気概を起こさせる事を徳育としている云々…」と諭してくれました。私はこの時学問の原点はここにあると敬服しました。



図7 埼玉養蜂(株) ローヤル会館にて

昭和43年亡父が念願のローヤル会館（養蜂資料館）を開設し、そこで自作の書画展を開きました。この時岡田・松香両先生はご無理して遠い所を御来館下さったのだらうと、当時の写真を見て今思い浮かべて居ります。その後亡父の叙勲記念誌「吾がみつばち人生」の発刊に当たり序文に先生が「日本養蜂の実力者、日本養蜂協会の幹部として土台石のように活躍されている。個人的にも格別の御指導を仰いだ異色の大先輩である」と御誉めの言葉を頂戴しました。然し末文に「花を求めて働き続ける合理的なミツバチ社会への深い愛これが総ての原動力である…」と結んであります。先生は暗に人生は蜂から蜜を搾り取るばかりでなく野に於いて花粉交配し結実させ巣に帰っては蜜を貯め女王蜂を中心に一群の平和と繁栄を願って止まない、ミツバチ社会の愛情、即ちこれが人間愛の社会であると論されています。それ以降亡父は何時からかは知れないが何事も分からない事があつたら蜂に聞け「蜂は神であり師である」と言う様になりました。亡父も私も先生を尊敬し、また蜂屋として近しくお付き合いさせて頂いている事を誇りに思っています。

時は流れて日本が高度経済成長期を迎え蜂蜜の需要が増大しました。昭和38年遂に蜂蜜を緊急輸入し同44年には中国より6,800トンとなり「レンゲ」「アカシア」が主力で、その生産の実情を知る為翌年廣州の交易会に参加しましたが、そこでは生産状況を知る事は出来ませんでした。蜂蜜の増産と貿易拡大及び技術交流を目的として北京総会社に再三申し入れをしました。当時北京まで行く事は至難の業でありまし



図8 養蜂技術交流訪中団団長として中国へ

た。そこで私は(株)組合貿易を交渉の窓口とし、遂に3年にして念願が叶い全日本はちみつ協同組合で岡田先生を顧問とし快諾を得て、我が国最初の「養蜂技術交流訪中団」を5名で組織しました。同48年8月14日羽田空港より香港へ、それよりは列車にて深圳経由で広州駅に午後3時半頃到着しました。すると北京から電報で「すぐ飛行機に乗れ」との指示が駅に届いていたので、あわてて上海経由で北京に向い夜の9時半に到着しました。そこで御要望のあったイタリアン種系の新女王蜂15匹を中国養蜂学会の馬先生にお渡し致しました。

翌日招待者の中国土産産総公司余光副總經理を表敬訪問し今後の日程を打合せ、訪問地を北京と上海に決めました。毎日午前中は総公司、養蜂研究所北京市養蜂関係各方面の方々と世界・日本の養蜂事情や蜜蜂の品種蜜源等の状況について会議をし、学術的な話になると岡田先生の力に頼るばかりでした。午後は故宮博物館を始め万里の長城・貞陵（地下宮殿）・天壇公園・頤和園・刺繍工芸館等を見学しました。ドイツ製の自動車ですべて送迎され晩餐会では北京ダックを始め珍味ばかりで、岡田先生は上席につくので遠慮しがちでしたが緊張の中にも楽しい学習が出来た様子でありました。北京空港は当時は広々とした牧草畑にコンクリート建ての事務所とグラウンド式の滑走路一本で飛行機を腕時計を見乍ら飛来するのを待った時代でした。

上海では日曜日に少年宮に案内された。9時出発で暫くすると道路の中央で旗を振っているのが見えました。すると車は右折し道路の両側に日の丸を振っている人波でありました。岡田



図9 上海、少年宮で子供たちと

先生は車の横に居った私に「どうしたのか?」と問い掛けられ、私が「歓迎のようですね」というと先生は「国賓並みだな」と言いお互いに顔を見合しました。門の中には熱烈歓迎の真赤な看板がありそこで車を降りると小学5年位の子供が一人づつ手を携えて我々を会場まで案内してくれました。子供の代表は「私達がしている仕事を日本の子供達に伝えて下さい」と挨拶した。少年宮は区単位にあり絵画、音楽、京劇、工作、電気、通信、射撃等あらゆる分野に渡って活動し、勉強の為総ての設備、指導がなされていて、皆自由に使い後は整理し保管する。それらの道具類は一個も紛失盗難はないとの事でありました。将来この子供達が大人になったら素晴らしい国になるであろうと感激したものでした。この訪中では先生の御指導と御協力により技術交流の使命を果す事が出来て皆感謝致して居りました。

その後中国との国交の正常化と共に日本も蜂針療法の発展の兆しがあるので今より11年前に私は連雲港市蜂療医院長の房柱博士を知り日



図10 自宅に房柱博士をお迎えして

本に招待致しました。その時に玉川大学の岡田先生とお会いしたいとの申入れがありました。既に先生の名声は広く中国の養蜂学会に於いて知れ渡っていたのです。房博士は玉川大学で研究設備や蜜蜂を見学され、その足で先生の御家庭を訪問しやさしい奥様の手厚い歓待を受けた事をよく話されます。

米寿を迎えられた先生への思い出は尽きることなく私の胸の中で蘇ります。

今後とも益々岡田先生ご夫妻の健康長寿を祈念致しましてお祝いの言葉とさせていただきます。

岡田先生とローヤルゼリー

鳥取県養蜂組合 末次 晃

このたび岡田先生には、米寿をお迎えになられ、心からお喜び申し上げます。先生とは、ミツバチ科学研究所の主任をされる以前から、養蜂生産者の研究グループで何回か会合をした記憶があります。その頃から養蜂生産物の健康食品としての効用については興味がありいろいろの面でご指導をいただきました。

去る1988年1月10日のミツバチ科学研究会より帰宅後、何となく発声が不自由になり、病院で診察を受けましたが、喉を無理しないようにとのことで、しばらく無言の生活をしましたが一向に回復の兆しなく、7月鳥取医大で精密検査の結果、左声帯に腫瘍形成とのことでさっそく翌日よりコバルト療法が始まりました。

医師としても治るか治らないかはやってみなければわからないとのことで大変頼りない話であり、一応は最悪の場合も覚悟していましたが、ちょうどその頃岡田先生よりローヤルゼリーはコバルト治療の副作用に効果があるとのこと親切なお便りをいただき、医師とも相談の上、生ローヤルゼリー10gをハチミツに溶かして毎日服用することにしました。コバルト療法は1週間に5回、連続35回実施されましたがその間何の副作用もなく最後まで普通食でガンを征圧することができました(喉のコバルト治療は熱のため食道が腫れ食事が通らなくなり中断するのが通常のようなので)。担当の教授も希に見る体質と不思議そうに話されましたが、小生は口

ーヤルゼリーの効果と確信しています。その後、5年間は毎月1回検査のため通院しましたが、再発もなくその後プロポリスを服用して健康な生活を送っています。あの時岡田先生からの指導がなくローヤルゼリーを服用していなかったらどうなっていたことか。現在、小生もローヤルゼリー・プロポリスを販売しながら先生のことを思い出し感謝いたしています。

いつまでも健康に留意され業界のため長生きして下さい。小生も今年は喜寿を迎え友人より次のような文面の掛け軸を贈られ、そうありがたいと願っています。

福寿綿々長似海 春風浩々気如河（釈）

（大意）幸福と長寿は海と同様に千年も続き、春の風が浩々として吹いて気持ちを清い流れの川のようにしてくれる。

ミツバチ生態写真家 岡田一次先生

元玉川大学出版部・アマチュア養蜂家 田口 迪太郎

お庭にニホンミツバチの巣箱がおかれている玉川学園のお宅で、数冊のアルバムを拝見したときのことが忘れられません。

すべて先生ご自身が撮られたニホンミツバチの生態写真には、一枚一枚に、撮影の場所と年月自が凡帳面に書き込まれていて、先生が写真に語らせようとしておられる夢と真実が、素人目にもはっきりと読み取れるまでに仕上がっていました。

にもかかわらず、先生は、なおも完成度を高めるために、第三者の助言を期待しておられるようでした。思いつきを二、三並べた記憶が残っていますが、私家版『ミツバチ記』と、それにつづく『ニホンミツバチ誌』という名著誕生の息吹にふれることができた感銘は一入です。『ニホンミツバチ誌』が、このたび玉川大学出版部から再版されて、より多くの読者に会える

ことはご同慶のいたりです。

思い起こせば、岡田先生に最初に執筆していただいたのは、筆者が駆け出しの編集者だったころ、昭和31年（1956）刊行の「玉川こども百科」全100巻の中の一冊『みつばち』でした。紙の質も印刷の程度も、まだ戦後の混乱を引きずっていた時代、岡田先生が写真部とともに、2年余にわたって苦心撮影した、写真で綴った、日本ではじめてのまとまった本ではなかったでしょうか。先生の長いご研究歴と深い学識については、いまさら述べることもありませんが、筆者が存知上げているだけでも、先生の蜜蜂の生態写真歴は、すでに40年を超えておられるのですから、先生の著作の中で、写真が語りかけてくる力の大きさがうなずけるわけです。

昭和50年（1975）に玉川選書の一冊として書いていただいた『ミツバチの科学』の後書きに、先生は「もし私たちのミツバチ研究の成果が学界で認められ、少しでも世のために役立っているものであれば、今後は世界レベルを目指して大いに発展したいものである」と書いておられます。その後二十年余を経て、先生の膝下から育った豊富な人脈（酒井哲夫、竹内一男、松香光夫、佐々木正己、吉田忠晴、小野正人、中村純他の諸先生）は今や、アジア養蜂研究協会の主要メンバーとして情報発信に活躍される



図11 イチゴハウスでカメラを構える

一方で世界的な研究舞台で、堂々と発言しておられる躍動ぶりは、毎号の「ミツバチ科学」誌上で拝見しているとおり。先生の二十年前の願望は、今日みごとに現実のものとなっております。岡田先生のますますのご長寿とご研鑽を、そして玉川大学ミツバチ科学研究施設のご発展を併せてお祈りいたします。

筆者は、残念ながら、岡田先生に、直接ご教

授頂く機会にめぐまれませんでしたが、優れたお弟子さんたちの親しい指導を仰ぎながら、おかげさまで、庭先で、アマチュア養蜂を楽しみ、ミツバチを介して自然との触れ合いを深めております。その意味で、岡田先生の孫弟子を自任しておりますが、お認めいただければ幸いです。

岡田先生とニホンミツバチ

京都府養蜂組合 野口 耕司

岡田一次先生がご壮健で米寿を迎えられました。ミツバチのとりもつ縁で思いがけなく先生のご知遇を戴いた者として、心からお祝いを申し上げ、これからも益々お元気でご活躍のお姿を見せて下さいますようお願いいたします。

京都でニホンミツバチの講演があるから君も来ないかというお誘いを戴いて喜んで参加しました。野々垣禎造氏が一緒でした。会后お茶の時に「ところで岡田先生のミツバチの科学に雄蜂の幼虫でテントウムシを育てるということがありますかその学生さんはどなたですか、」とお尋ねすると、「それは私です」と野々垣氏が言われて、俄に若い教授と学生というお二人の懐かしい時代が蘇った。「たしか特許をとられたということですが、もうかりましたか、」「さっぱり駄目だったなあ、」と話は続いた。「夜が更けて疲れてくるので一ぱい飲みたくなるのですが、先生が甘いもの好きなので、アンパンを買ってこいといわれてガックリした。」という話は実感があった。先生の甘いもの好きは後日談があるが略する。

先生が席を立たれたとき、ニホンミツバチ誌の話になり、野々垣氏が「この後先生がほっとされたら困るので次のことを皆で相談している」と言われた。さりげない言葉であったが、師弟というより仲のよい親子のような情がかんじられて、岡田先生のまわりにあたかい人の輪

が取り巻いていることが見えるような気がした。

岡田先生が情熱をこめて回りの人々に接しられたからこそ生まれた人の輪である。玉川の研究の柱をニホンミツバチに据えられたのは、岡田先生の卓見であった。新しい発見が次々と玉川で生まれている。まだまだ未知な分野も広い。岡田先生が初めて京都へお見えになったとき、私の家にニホンバチがいたので来ていただくことになった。平木二郎さん、岡本俊輔さん、小林常員さんなどニホンミツバチに縁ある人達に集まってもらってお迎えをした。二段箱で各階に縦長の巢門をつけたのがあった。暑い日得上の巢門の回りに扇風蜂が出ていた。

岡田先生はいきなりその前の土にドカッと腰を落として睨みつけるようにカメラをのぞいていられた。凄い迫力であった。科学者の正体みたり、というか堂々たる姿であった。後で伺うと、ニホンバチは巢門に後を向けて扇風するとのことになっているが、総ての蜂がそうであるのか調べたものはない。ということであった。

そのときの写真をみると5匹は正規の姿勢で真面目にやっていたが3匹が違う方をむいて義務的に羽を動かしていた。巣箱の一つにヤブカラシに包まれて1m程先の小さな隙間からセイヨウ蜂の盗蜂が盛んに出入りしているのがあった。曲がりくねった通路の奥の巣箱のなかを盗蜂がどうして見つけ、仲間を誘導している

のか理解できかねたので岡田先生に伺うと「音だよ羽音」と言われた。よく分からなかったが、その後1月の玉川研究会で羽音とコミュニケーションの関係を測定器を使って解り易く解明した発表があった。なるほどこういうことか、

と腑に落ちた。

ミツバチ科学研究所は研究施設と名を変えて世に大きく認められる存在となりました。これを生み出し育て上げられた岡田先生に改めて敬意を捧げます。

岡田先生の思い出

小野養蜂場 小野 保一

岡田先生との初対面は1961年2月17日である。千葉県養蜂協会ではこの頃、春の総会に講師を招いて養蜂研修会も同時に開催していた。小生も千葉県に転飼していた関係で総会に出席して、先生の講演を聞いたのが最初の出会いである。1960～61年はローヤルゼリーブーム到来の頃で、生産者はローヤルゼリー多収の技術、採乳時間の問題、保管方法などわからないことが一杯あった。先生は学生を3人くらい連れて、何冊かの本を持ってきて外国の例を出してローヤルゼリーについての解説をしてくれたが、苦言の多い講演だったように覚えている。それでも懇親会の折には小生達若い者(当時36歳)は岡田先生を囲んで夢多いローヤルゼリーの問題点についてご教授いただいたことを思い出す。

1961年頃は、ナタネ蜜が年間1群3缶～4缶採れても、1缶2400円ぐらいだったので養蜂経営は楽にならない。ローヤルゼリー1gは金1gと同じ相場という噂にひかれてローヤル

ゼリー生産に養蜂経営の活路を見いだそうとした時代であった。

先生はローヤルゼリーについて最初から甘い言葉は少なく、苦言ばかり多かったように思っている。それでもそのことが現在のローヤルゼリー500億円の市場といわれるまで大きく発展し、40年近くも続いてきた原因の一つであると信じている。

岡田先生は、北限のニホンミツバチを観察するということがあった。1963年7月28日のことである。秋田県太田町の藤原敏雄氏(故人)と二人で青森県からお供をしたことがある。むつ市大湊駅から案内人にしたがって山に入ったら木の空洞にニホンミツバチの巣があって大事に守られていた。後日岡田先生の本に、この巣が北限のニホンミツバチの巣である、と書いてある。小生にとっても記念のニホンミツバチになった。

その後も何回か岩手に来ていただいているが、ニホンミツバチのスミシとか、最高貯蜜量はどれくらいか、など岩手に来たときは養蜂家達みんな集まっていろいろお話ができた。先生がおいでになるのを仲間達みんな楽しんでしていたものである。

1996年5月23日、吉田忠晴先生と中村純先生が北国のニホンミツバチ研究のため、ひとつの巣から数匹ずつでよいが捕獲できないかという案内があった。普通ニホンミツバチは岩手にも青森にもいるから簡単なことだが、北国のニホンミツバチの研究というのであれば、岡田



図12 ニホンミツバチの巣をうかがう

先生と見た北限にいる下北半島のニホンミツバチを是非研究材料として使って欲しいと思って、下北半島横浜町養蜂業沢谷昭二郎氏に依頼してニホンミツバチの巣を探していただいたが見つからなかった。今は山の木の空洞も伐採されて巣づくりの環境も悪くなってきているので、あの岡田先生と見た北限のミツバチの子孫達元気に巣づくりしているのだろうかと心配してる。

1964年9月5日、岡田先生と四国徳島市山口喜一氏を訪問することになった。このときも秋田県太田町藤原敏雄氏と3人であった。ローヤルゼリーをたくさん採るためにはどうすればよいかという問題は常に我々養蜂業者にはある。この頃小生は、一群あたりの乳量は他業者よりも少ないと思っていたので、たくさん採っている業者について勉強したいということをお先生に相談していた。山口喜一氏は剣山山麓の何か所かに蜂場を設置していて、環境のいい採乳ハウスの中で仕事をしているのを見て大変勉強になった。当時は未だ採乳方法等については情

報公開されていなかった時代だったので深く感謝している。四国地方の旅行はこれが最初で最後になっている。

岡田先生が玉川学園内に住んでおられた折には時々参上することもできたが、数年前から相模原市に転居されたので遠くなってちょっと不便を感じている。

岡田先生と長い間のおつきあいから、ミツバチは花粉媒介等日本の農業にとっては大切な昆虫であり、ハチミツ、ローヤルゼリー、プロポリス等、人の健康に役立つものを生産しているのだから、そのためにもみんなでもっとたくさん花を作ってミツバチが喜ぶ環境を作っていかなければならないということをお教わったような気がしている。

先生も米寿を迎えられたと伺いました。おめでとうございます。これからもミツバチのお話をいつまでもお聞かせ下さいますようお願いしています。

ローヤルゼリーの創製期

三島食品工業（株） 小畑 博美知

およそ40数年前、フランス、ドイツなどヨーロッパ先進諸国でミツバチローヤルゼリーが人体に対して特効薬的な可能性を秘めていると話題になり、我が国でも「不老長寿に効果あり」とマスコミに誌に大々的に取り上げられ多面的に深い関心もたれつつあった。卒業後NHK山形に勤務して2年、その職務にも慣れて来たある日、岡田教授（当時）から一連の速達便を受け取った。「今、世界的なスケールで重要なことが起きつつある。この大事な仕事は君にしかできない。現職を辞してこの事業推進に参画して欲しい。」との内容で、その後も数次に亘る強い勧誘をいただきこの仕事に賛同した。

その重要な事業、それはカルピスKKの創始者で当時三島食品工業（株）の社長であった三

島海雲氏がかねてより人類の健康増進に寄与することが終生の念願であるとの強い理念のもとに幅広く食品の研究開発に力を入れ、ローヤルゼリーについても外国より早くから入手して強い



図13 三島海雲氏夫妻と

関心のもと、その検討を進めていた。しかしこれら輸入品には満足ができず、ローヤルゼリーに関するすべての面から根本的にしかも徹底した解答を引き出したいとの強い願望のもと岡田教授を中心に東大など多くの研究機関とタイアップしたプロジェクトチームを組み、その事業をスタートさせた。

まず手始めに各種の分析に今日するため起源の正確なローヤルゼリーの採取を行う。当時、まったく暗中模索の状況下にあった採取方法の確立、将来に向けての量産技術の検討開発（移虫後の時間別採乳量を含む）などを初期のメインテーマとし、途中野々垣禎造氏も参加、岡田教授の厳しい指導の下にこの事業がスタートした。幸い玉川大学では早い時期からドゥリットル氏法による女王蜂養成法をほぼ完全に確立しており、この技術応用によるローヤルゼリーの生産に伴う諸問題は予想以上に早く完成することができた。この間、岡田教授は「人間はウソをつくがミツバチは正直、その生態を見極めて習性を充分に応用することが最大のポイントで

ある。この研究の成功が養蜂業界の発展につながれば喜ばしい限り」と常に厳しい指導、激励をいただいた。

しかしまもなく全国的にローヤルゼリーの大ブームとなり、ある一派は移虫後 24 時間採乳は特別貴重であると商業上の差別化を図り、当時純金の取引価格並に法外な価格をつけるなど悪徳商法も横行した。このような非常に混乱した時期にも岡田教授は「正しい行為は必ず勝つ」と固い信念のもとに自説を押し通した。

現在、我が国のローヤルゼリー消費量は世界で最多量を示しており、アジア諸国をはじめとした我々の技術移転による開発途上国の経済向上にも役立っていることは感銘深いものがある。

「キミーそれは違うヨ」といろいろな場面で指摘をいただき、「オヤジさん」「イッチャン」と我々仲間では呼び合い 40 数年の長きに亘り指導を賜った岡田先生の米寿を心よりお祝い申し上げます、どうぞお元気で多くの弟子の活躍にご期待下さい。

岡田一次先生との接点

第 1 話

62-40=22 これは昔話をするために何年前かを逆残下式で、私の年齢差である。この頃私は大学 2 年生だった。今は自然保護でご活躍中の柴田敏隆さんが横須賀市立自然博物館に勤務されていた頃、柴田さんの紹介で横須賀の野比海岸の自然観察会に参加したことがある。当日の海岸は春というのに寒風が吹いていたように思う。この日の指導者が岡田一次先生だった。海の観察会になぜミツバチ先生なのかわからなかったが、自然を愛し、自然に学ぶという先生だと思った。真面目で、面白い話をして下さる普通のおじさんと見えた。

白梅学園短期大学 近藤 正樹

第 2 話

私が白梅短期大学に就職したのはそれから 12 年後である。篠原圭三郎先生というムカデの先生から「卒業生でアリの勉強をしたがっている者がいる」ということで玉川大学の 1 年生進藤正男さんを紹介された。ミツバチではなくアリをいじくりまわすだけで、どうやって卒業研究をすすめるのが私の興味でもあった。「ローヤルゼリー」を食べさせるとアリの生殖虫（特に雌アリ）が育ちやすくなるはずだと彼は言った。ローヤルゼリーの成分のうち、微量で機能的な物質があれば発育を促進するメッセンジャーとしての意味もあるだろう。しかし、タンパク質の少ない甘露を常食としている

アリにこのような高タンパクの物質が与えられたならば、健康優良児（つまり雌）が育つに違いない。後者の考え方は、昔の粗食の日本人に、孫太郎虫を飲ませたり、鶏卵を飲ませたりして、健康を増進させたのと大差ないことになる。

結果としては、ローヤルゼリーを与えられた幼虫が生殖虫（雌）になり易いという現象は肯定されたと思っているが、ホルモンやフェロモンのような機能が備わっていたか否かは確かめずに過ぎてしまった。とにかく御利益の大きい高価な物質を自前で供給している組織こそ、岡田先生が造って育てたミツバチ科学研究所であったのだ。先生は研究者と事業家を兼備した方だったのだろうか。

第3話

1977年というと、ちょうど20年前のことである。第8回国際社会性昆虫学会議（オランダのワーゲニンゲン）に出席した私と松本忠夫さん、安部琢哉さんとが帰国後、坂上昭一さんと山根爽一さんに呼びかけて、休眠中の日本地区会の再興をすることになった。会員を募ってみると、大手筋の教室玉川大学があった。一般にいう教室とミツバチ科学研究所という人材プールがあり、皆さんがミツバチやマルハナバチという甘い生活をしている蜂を研究していたのである。その頃はポーランドで野生のミツバチの話聞き、マルハナバチの蜜を恐る恐るなめた経験と重ね合わせて、興味があった。私はミツバチを直接研究対象にしたことはない。しかし解剖にしる、神経系の研究にしる、人工授精の研究にしる、アリの研究では見習うべきことが多い。国際学会に出るたびにアリ屋とミツバチ屋の間をウロウロ歩き回る癖がついてしまった。「ミツバチ科学」をいただくに及んで、仲間

になりきった気分にもなっている。酒井哲夫さん、松香光夫さん、佐々木正己さん、吉田忠晴さん、小野正人さん…と第1線級の学者を育てて来られたのが岡田先生ということになる。質・量ともに岡田先生の偉業に学ぶべきと感じ入っている。

第4話

年賀状は昭和63年以後いただいている。初めは私が書いたための返礼だと思っていたが、このたび手紙類を整理してみたら、その前年から「突然のお願いで恐縮」という手紙がでてきた。これまた10年昔のことである。ミツバチの巣箱に出入りする気になる奴アリについての問い合わせである。私は大先生に頼まれたことで気をよくして何かと返事を出し続けた。そして「ミツバチ記」や「ニホンミツバチ誌」などをいただくようになった。岡田先生に憶えていただいたことがうれしい。

……………

それにしても野比でお会いしたときには先生は46歳、玉川大学に着任されて6年目ということになる。そのとき、「若い研究者の礼儀」など堅い調子の話を伺ったことを記憶している。その先生から著書をいただける身になったことは本当に嬉しい。こんなことを思い出しながら、この依頼原稿を考えてみた。おや、私の話「先生との接点」は10年ごとに発展しているではないか。

先生の歴史の後半40年を、私なりに飛び飛びに拾って米寿の記念にしたい。次の10年にはどんな接点が待っているのだろう。

また、この機会を与えて下さった編集委員にも御礼を申し上げたい。

「新昆虫」での出会い

三重大学生物資源学部昆虫学研究室 松浦 誠

岡田一次先生の名前を初めて知ったのは、今からもう40年余も昔のことである。あらため

て数えてみると、私が小学5年生のときだから1956年であった。

当時「新昆虫」という名前の昆虫関係の月刊誌が、北隆館から出版されていた。内容は、昆虫全般にわたっていたが、現在の「昆虫と自然」よりもやや専門書過ぎて、難解な部分が多かった。しかし、昆虫関係の図鑑や書籍が乏しかった時代なので、その頃昆虫の採集や飼育に夢中になっていた小学生から高校生くらいまでの少年の多くは、その雑誌が店頭に並ぶのを待って、立ち読みに出かけた。私も写真や図をながめたり、巻末のムシペンなどを拾い読みして、毎月、書店でその本と出会うのが楽しみであった。しかし、小学生の身では、いつも立ち読みだけで買うことはなかった。

ところが、その年の10月号に「オオスズメバチの習性—ミツバチ保護の立場から」と題して、岡田先生の記事が巻頭に載っていた。内容は、この世界最大のスズメバチに関する経過習性、巣、ミツバチの被害、人の被害、防除法などの項目があって、7頁にわたっていた。オオスズメバチについて、これだけ詳しい記述は初めてであった。

小学生の私にとっては、これらの記述は難しい部分が多かったが、中身を全部読まないうちから、この号だけはどうしても手元におきたいと思った。そこで、急いで家に帰り、親に頼んで本代をもらって再び本屋に戻り、すぐ買って帰ったことを覚えている。

そこに書かれていたオオスズメバチに関する記事内容は、その後何度も読み返し、文章はもとより写真や表の配列まで、ほとんど暗記するほどになり、いまでも脳裏に深く刻まれている。

その頃、私はオオスズメバチに対しては異常な執着があった。というのは、その2年前に、札幌市の円山公園で昆虫採集をしている最中に、オオスズメバチの巣のそばを駆け抜け、怒った集団に攻撃されて体中を刺された。体が麻痺したように動けなくなり、九死に一生を得る体験であった。北海道では現在でもオオスズメバチは非常に少なく、私にとってはこの時がオオスズメバチとの初めての出会いであった。



図14 内外の研究者を自宅に迎えて

蟬のように大きな体、激しい攻撃性などには圧倒されたが、その一方でなんとも凄いハチがいるものだと子供心に感心してしまった。それ以来、このハチの地下王国の様子がどのようになっているのか知りたくて、親に内緒で何度も現場を訪れた。2度と巣へ近寄ってはならないと厳しく注意されていたからである。しかし、オオスズメバチの生態の知識がなかったので、巣へ近寄るたびに攻撃されては森の中を逃げ回り、結局、巣を掘ることもないまま、冬が訪れすべてが雪に埋もれてしまった。その後、高校1年の時に、夏休みのほとんどをこのハチの追跡に費やしてとうとうオオスズメバチの巣へたどりつき、しばらく巣の付近で観察を続けた。そして、秋になって初めて独力で掘ることができたが、この時も数ヶ所を刺されて動けなくなり、山中で夜を過ごした。その時は巣を採る前にも、採った後にも、上記の「新昆虫」を取り出し、岡田先生のオオスズメバチの記事を何度も読み返した。それは、私にとってスズメバチ研究の「バイブル」的存在として、表紙はすっかり擦り切れてしまった今も、大切に本棚に納まっている。

その後、私は趣味としても本業としても、今日までスズメバチの研究を続け、そのかたわらニホンミツバチやセイヨウミツバチも30数年飼っている。

この間、岡田先生からは、いろいろとご助言をいただいたり、ご自宅にもお伺いしてご指導を受け、お互いに研究者としてもお付き合いをいただいていることは、私にとってこのうえなくありがたいことと思っている。

岡田一次先生のご長寿をお祝いして

岡田先生には父（丹治）の代から私の長男（隆太）まで3代にわたってご指導いただき、心から感謝しています。このたび米寿をお迎えになられたことを知り、誠におめでとうございます。どうぞ、末永くお元気で活躍賜り、蜂界に生きる私たちを、ご指導下さいますようお願いいたします。

私の学生時代の強い印象はなんといってもローヤルゼリーに関わることです。私の養蜂人生はローヤルゼリーの創成期から始まりましたのでローヤルゼリーの国際的な健全な発展を願う者の一人です。今日世界屈指のローヤルゼリー消費国としての日本が世界に誇るべき実績をあげるに至ったことは本当に夢のようですが、ここ数年の現状を見ると、決して健全とは言えないのが残念です。我が国でももっと生産量をあげて、本当に価値のあるローヤルゼリーの存在をアピールしていかななくてはならないのではないのでしょうか。先生、どうぞご指導をお願いいたします。

平成4年4月7日に私たちの名古屋市養蜂組合が創立45周年を記念して岡田先生をお迎えして記念講演会を開催できたことは、私にとって生涯忘れ得ない思い出のひとつです。幸い愛知、岐阜、三重、静岡の養蜂家の皆様を中心



図15 国際養蜂会議（名古屋大会）で

（株）養蜂研究所 井上 敦夫

に遠くは埼玉、大阪、奈良、長野からご出席いただき、盛大な集いになったことは感謝の気持ちで一杯です。私は岡田先生がお元気なうちにぜひ愛知へお越しいただき、大勢の養蜂家の皆さんの前で講演いただく機会をもてればと思っていました。私たちの養蜂組合の25周年記念を理由に、勇気を出して、町田市の先生のご自宅へ直々お伺いしてお願いしたのですが、先生からOKのご返事をいただいたときは、長年の夢が果たされた想いで感慨無量でした。それは長年の蜂界の夢、願いであったのではないかと思います。

岡田先生が戦後まもなく玉川大学でミツバチの研究を始められた頃、愛知の安城市からミツバチが玉川へ送られたことを、当時このお世話をされた神谷さんからお聞きしたとき（1981年）以来、ぜひ一度、愛知県で先生のご講演をと思っていたのでした。

1985年に名古屋で開催された第30回国際養蜂会議を記念して日本で初めてのミツバチ切手が発行できたことも忘れられないことのひとつです。岡田先生のお気持ちがニホンミツバチがデザインに登場することになったと後で風の便りに知り、岡田先生のニホンミツバチへの限りない愛着に感服せざるを得ませんでした。

岡田先生、どうぞいつまでもお元気で、そして私たちをご指導下さい。



図16 会議を記念して発行された切手

今こそ岡田哲学を世の中に！

(株) 下鳥養蜂園 下鳥 大作

まず持って、岡田先生がお元気でお過ごしのことを心よりうれしく思います。時代の流れとは本当に早いものつくづく感じます。思い起こせば私が大学4年の時だったと記憶しておりますが、ちょうど先生が還暦をお迎えになられた折り昆研の4年生で相談をしてお祝いの記念品を贈る計画をたてました。皆で少々のお金を出しあって菊の花の盆栽を贈る事にしました。お祝いの宴席を奥様に大変苦勞をかけ（毎度のことですが）先生のご自宅で行うことにして、私が百合が丘まで買いにいってまいりました。4年生一同はどれほど喜んで下せるか期待をして、さっそく先生にお渡し致しました。先生の感謝の言葉は「ありがとう。でも、わしゃ、キクは嫌いです」でした…。その時だったかどうか定かではありませんがかなり宴会が盛り上がり、我々同級生の十八番の岡田先生へ贈る、例の（いっちゃんね、アンバンが大好きほんどだよ…）の歌が飛出し（この歌は、我々は気に入っていたのですが、諸先輩には大変不評でいつも苦笑をかっていました。先生はいつもニコニコしてその歌を聞いておられましたけどどう思っていたかは、今もわかりません）、ついには先生のお宅のカラカミを破ってしまう仲間も出てまいりました。先生もその時、カラカミに大きく「男」と書いたものを見せました。今振り返って見ると先生も、そして我々も大変若く情熱があったものだと思えば懐かしく思い出すとともに、我々は我々としての青春の悩み、先生は先生としての中堅教授としての苦惱がそこにはあったような気がします。今では、楽しい思い出の一つです。

岡田先生と私の御付き合いは他の同級生より少し長いお付き合いです。家業が養蜂業という関係もあって、一年生の頃から当時工学部にあ

った研究室や御自宅に出入りさせていただきました。先輩諸氏が労作で先生の御自宅の庭にツツジの木を植え、その後ご苦勞さん会を先生のお宅でやらせて戴いた会がありました。私も呼んで戴き、労作は先輩方におまかせで飲み食いではりきった思い出もあります。

先生の授業を受けた学生の多くが感じたことですが、当時では大変ユニークな授業で、物を教わる事みでの教育を受け、あまり物事を自分で考える訓練を受けていない我々学生にとっては不可解で分かりにくい授業でした。時には学園の庭に出ての勉強で、ウメの木の下に行き、先生は学生に尋ねます。「この木は何の木ですか?」。学生は答えます。「ウメの木です」。先生はおっしゃいます。「本当にウメの木ですか? どうしてこれがウメなのですか?」。この辺になるともう学生はついていけなくなってしまいます。先生は常にこういう方法で自然の見方、自然に対する謙虚さ、学問は疑問からはじまること、科学する心等を身を持って教えて下さいました。ヒメジョーンとハルジョーンの違い、ニホンタンポポとセイヨウタンポポの違い等も今思うと懐かしい教材で、花を見る度、岡田先生の事や授業、学生生活が心に浮かんできます。小原國芳先生がおっしゃっていた「教育とは卒業後の思い出」という理念を受け、実践の場で学生にその理念をたたきこまれた岡田先生の授業や、小原先生の玉川教育は、今日、社会に出て苦勞してみると初めて理解もでき、懐かしくも思い、明日への活力にもなります。

ともすると競争社会で、正直者が馬鹿をみる今の世の中。不正が横行し、人間の助け合いの心が乏しくなり、希望や夢をもてなくなった子供や大人が大勢いて、全員が万年欲求不満のような物質優先の世界において、ふっと、ふりか



図 17 学生たちと蜂場で

えって見ると、岡田先生に、そしてその授業に、考えかたにとっても心の安らぎを覚えます。岡田先生はミツバチの世界に大変貢献され、研究の業績や、本を含めた出版物は多数あり、そして現在も研究に取り組んでおられるお姿はまったく頭の下がる思いです。そんなお忙しい先生の毎日に、大変とは思いますが、ぜひ先生の科学する心や自然にたいする物の見方、考え方をまとめた本を書いて戴けたらと思います。

先生の生き方がまさしくそうであるように、先生が常に口になさる「何事にも、ピュアーでなくては、人生はピュアーでなくてははいけません。」の言葉こそが今の世の中を生き、改革していく為が一番必要な指標ではないでしょうか。学生時代、今だに残念だったし申し訳なかった思い出もあります。2年生の時でしたか、研究室で3群のセイヨウミツバチのイタリアンのゴールデン種を入手しました。先生に呼ばれ「この蜂は君に任せるから管理するように」と言われました。農場の一部に置いて管理をしま

したが、蜂に刺されると全身が痒くなってしまいう体質もあり十分な管理をしないまま蜂群をだめにしてしまいました。まったく情けない話です。せっかく先生が期待して下さったのにと、今でもくやしく思い出します。今であれば少々養蜂に対する知識と技術もあり、体質も蜂毒に対し強くなっているのできっと良い結果が出せたのと思います。先生、すみませんでした。卒業後は幸いに2年間、研究室に助手として残らせていただきました。ちょうどテントウムシの人工飼育をミツバチの雄蜂児を使って行う研究が盛んになってきた時期で私も勤務後、毎晩遅くまでテントウムシのエサ替えをやったものです。毎日、飼育終了して帰宅するさい先生に電話を入れるのが日課でした。あまり遅いと先生は私の健康をきづかってくださり、その時の言葉でまた次の日もがんばれたような気がします。

先生は当時、目が真っ赤に出血することがありました。そうすると先生は目をおさえ、「また目がパンクしました。パンクしました。」とおっしゃいます。新宿の病院にすぐに行かれ、数日で出血がひいてきます。そんな健康状態がかわって、ご自身の健康管理に気をお付けになるようになって、いま米寿をお迎えできるのかも知れません。本当に喜ばしい限りです。また、その陰で、子供みたいに純心な先生を支えてこられた奥様の御尽力の賜物とも思います。どうかこれからも御二人、未長くお幸せにお暮らし下さいますようお願い申し上げます。

岡田先生とハチミツ

(社) 全国はちみつ公正取引協議会 相田 由美子

岡田先生が米寿を迎えられたこと、誠におめでとうございます。先生に初めてお会いしたのは、昭和50年(1975)でした。存じ上げている先生の紹介によるものです。生物学(植物学)出身のもの見方と、昆虫学や農学部の立場の

違いを教えていただき、ミツバチに関する全般を、詳細にわたって自らが指導いただきました。養蜂学の一步として、蜜源植物を中心に、玉川学園周辺の畑、林などを歩き、カラシナ、レンゲ、ミカン、ニセアカシア、クリなどを求

めて、写真を撮り、都内のトチノキの場所までも教えていただきました。花粉の重要性や、北海道の自然、満州のことなどの話を聞くにつけ、いかに学生時代や卒業後の勉強をしっかりとされたか、またどんなにか熱心であったかをつくづく敬服した次第でした。専門分野では、文献をたくさん備えられ、常に新しい情報の必要性も説かれておられました。

その後、私は、先生のご推薦で（社）全国はちみつ公正取引協議会が、ハチミツの品質向上のために検査全般を行うことになり勤め始め、状況は少し変化しましたが、現在に至っております。昭和51年（1976）には3月には、玉川大学農学部昆虫学研究室で研修を受けました。ミツバチ、養蜂一般、花粉分析、化学分析などについて、当時のスタッフの皆様にご指導を受け、学生時代に戻ったようでした。5月には学生実習で、校内の巣箱からの採蜜実習に参加させていただき、初めて蜜蓋をナイフで切り取り、遠心分離器を回し、濾過したハチミツと出会いました。採蜜を体験し、採蜜直後のハチミツの香りのよさと、採蜜時についてきたミ

ツバチに刺された痛さは、強烈な印象となって残っております。

22年の間には、ハチミツに関する様々な問題、新しい検査法の開発、品質の判定法、ミツバチ飼育上の問題、蜜源植物の減少など、困難な問題が多々ありました。しかしそのたび、現状に甘んじることなく将来につながる展望のある考え方でご助言いただけたことは本当にありがたく思っております。

常に、科学者の目で、毎日の生活を観察され、ハチミツの重要性、何千年も続いてきた根底にあるのは、ミツバチ生産物の中ではやはりハチミツであるということをお忘れはけないというお考えを示されました。ニホンミツバチについても研究を進められました。

今後とも、健康に留意され、いつまでも、おいしい、品質のよいハチミツ生産ができるよう見守っていただきたいと思っております。

今回はこのような機会を与えられたことを感謝いたします。先生のますますのご健勝をお祈りいたしております。

「ニホンミツバチ誌」の発刊

元玉川大学ミツバチ科学研究施設主任 酒井 哲夫

岡田先生のニホンミツバチに対する関心と愛情の深さは、日本人として、その在来種ミツバチであるところから当然といえるかもしれない、特別であった。1952年研究室第1回卒業生大栄 中氏に依頼して宇和島（愛媛県）から1群のニホンミツバチを送ってもらい、セイヨウミツバチと隔離出来る学内の西南の端のクヌギ林に置き、観察を始められた。この群の働き蜂や雄蜂を形態学的特徴を計測するために供試した論文も発表された。

玉川大学では、百科事典を次々発行していた時期で写真部の職員と共に、日本各地を回る機会を活用して、ニホンミツバチの写真も撮り始

められた。そのうち、2眼レフの角形カメラを使ってご自分で盛んにミツバチの生態写真を撮られるようになった。プロ顔負けの作品が出来るようになり、写真部の職員達も驚き「ミツバチの写真については、先生にかないません」と兜を脱ぐに至った。

北は青森の下北半島から南は鹿児島の大隅半島に至るニホンミツバチ行脚を繰り返された先生の観察、撮影には竹内一男教授（現文学部）もよくお供をして助手を務めた。カメラも1眼レフの高級なものに、だんだんとグレードアップして先生の撮影の腕は、いやがうえにも上昇していった。米寿を迎えられた現在でも、毎日



図 18 今春再刊行となった「ニホンミツバチ誌」の表紙(右)の写真を撮影
(兵庫県美方郡温泉町井上にて 1985.8.25)

のように「最近、カメラが重くなったよ」と言いながら、近くの野や川へ昆虫を追って出掛けておられる先生である。

このように、ニホンミツバチをこよなく愛し、この日本在来のミツバチの繁栄を祈り、我々教え子達の今後の努力を期待して纏め上げられたのが『ニホンミツバチ誌』である。1990年に私家版として出版されたものを先生の米寿を記念して、玉川大学出版部で再版されたこと、さらに、欧米の方々にもニホンミツバチを更によく理解していただけるようにできたことは、幸いであった。

再版本を持って、松香教授と相模原の先生のお宅を訪ねると、先生は「表紙も写真もとてもきれいに出来ていて、最高だ」と殊の外満足していただいて、二人で本当によかったと安堵の胸を撫でおろしたのだった。

最近お会いした研究者や業界の方々が異口同

On the occasion of eighty-eight anniversary of Professor emeritus Dr. Ichiji Okada *Honeybee Science* (1997) 18 (3): 97-116.

This issue of *Honeybee Science* is dedicated to Prof. Dr. Ichiji Okada on the occasion of his 88th anniversary. To celebrate his great age and



音におっしゃるのは、「岡田先生のこれまでのミツバチ科学分野でのグローバルなご貢献、養導ご協力はもとよりであるが、一番に挙げたいのは立派な後継者を多く育てられたこと蜂及びミツバチ生産物業界に対する暖かいご指だ。」とのことであった。玉川大学の後継者のみならず、養蜂業界、昆虫学や医動物学界、それに初等中等学校の教員、農薬や農業プロパー等々実に日本の将来を背負う卒業生の多いことに改めて意を強くしているところである。

1949年以来、玉川大学の歴代学長先生が岡田先生のお人柄と熱意に賛同され、強力なご支援をいただいたお蔭であることに感謝しながら、岡田先生の教えを受けた我々全員が、先生の心を心としてそれぞれの分野で努力精進して行くことを、先生の米寿をお祝いしての誓いの言葉とする次第である。

to hope him make further researches along his long life, this article consists of congratulatory phrases and memories contriuated from researchers, beekeepers, and his disciples. To add this article a list of his publications is on pages from 117-128.